

この川を下ればきつと海に行ける

山田 明

○山上家・食卓（夜）

山上涼子（12）が弟の翔太（9）、両親の

郁夫（45）、美紀（42）らと夕食を食べて

いる。

会話が無く、咀嚼や皿の音だけが響く。

翔太、ちらちらと両親の顔色を窺う。

夫婦は、どこかよそよそしい雰囲気。

翔太「あの、ぼく思ったんだけどさ」

郁夫、美紀ともに翔太の顔を見ようともし

せず、黙って食べ続ける。

涼子が小さく咳払いをする。暗に「やめ

な」と翔太に合図している。

が、翔太は再び口を開き、

翔太「おじいちゃんにさ、会社に戻ってきて

もらったらどうかかな？」

郁夫と美紀はまるで反応しない。

涼子は口だけ動かし「バカ」と言う。

翔太「会社の人が言ってたんだけどさ」

郁夫「（強く）会社の誰が言ってたんだ？」

翔太「いや……誰って言われても……」

郁夫「会社のことをお前が心配する必要はない。それにおじいちゃんの話はするな。二度とだ。いいな」

翔太「……」

美紀「翔太、ご飯のときはうるさくしないで、静かに食べなさい」

涼子、口だけ動かし「バカ」と言う。

○涼子の部屋（夜）

涼子はベッド、翔太は床に座っている。

涼子「ホントお前ってバカ」

翔太「だってさあ、ホントに会社の人、そう言ってたんだもん」

涼子「だからそんなこと子供の考えることじゃないじゃん。それに翔太、おじいちゃんのことなんて覚えてないでしょう？」

翔太「うん。まあそうなんだけどさ……」

も」

涼子「でも、なに？」

翔太「もし、だよ、もしお父さんとお母さんがさあ」

とそこまで言って黙りこむ。

涼子「(笑って)お前、なに心配してるの？ 考え過ぎだって」

翔太「だって、この前の喧嘩のとき」

涼子「喧嘩のときにいろいろ言うのは当たり前でしよう。子供が余計な心配しないのと気楽に言って、そのままベッドに横になる。が、その表情はとても厳しい。

×

×

×

×

壁の時計は十二時近い。

ベッドの中に涼子の姿はない。

○キッチン（深夜）

テーブルにはすでに座る郁夫と美紀。

郁夫「(うんざりと)もういいだろう。今は会社のことではいっばいなんだ」

美紀「すぐそうやって会社の話には逃げるよね」  
郁夫「逃げてるわけじゃない。優先順位の違  
いだ。それに二人で話し合ったって、こう  
やってもめるだけじゃないか」

美紀「じゃあ、どうすればいいの？」

郁夫「だから、間に弁護士を挟むとか、いろ  
いろやり方はあるだろ」

美紀「(呆れて) 弁護士！ じゃあ、もう答え  
は出てるってことじゃない」

郁夫「そういうわけじゃない」

美紀「じゃあ、どういうわけよ？」

郁夫「だから、お前のそういう突っかかりか  
たが嫌なんだよ。話し合いにならない」

美紀「うん、ホントだ。あなたとは全然話し  
合いにならない」

二人、睨みあい、同時に顔をそむける。

#### ○階段（深夜）

階段の途中に涼子が座り、両親の会話に  
聞き耳をたてている。ひざに顔をうずめ、

動くことができない。

○通学路（夕方）

どんよりとした曇り空。

涼子がとぼとぼと下校している。

○山上ハム工場・外（夕方）

白衣の男たちが建物の外でだらしなく煙草を吸っている。

とても活気のある会社には見えない。

○同・敷地の外（夕方）

涼子が、悲しそうにそんな山上ハムの従業員たちを見ている。

ふと気付くと隣に翔太がいる。

○住宅街（夕方）

涼子と翔太が並んで歩いている。

涼子「ホントにおじいちゃんが戻ってくればうまくいくって会社の人が言ってた？」

翔太「うん」

涼子、立ち止まり夕陽をじっと眺める。

翔太は、気付かず先に進んでいる。

涼子「ねえ翔太」

翔太「(振り向き)なに？」

涼子「おじいちゃんのとこに行ってみようか？」

翔太「(聞こえず)えっどこに？」

涼子「(大きく)おじいちゃんところ。夏休みになつたら、おじいちゃんのとこに行つて、会社に戻ってくれるよう頼んでみようか？」

翔太「(ニッコリ)うん！」

○山上家・前

真夏の日差し。やかましい蝉の声。

○山上家・玄関・中

リュックを背負った涼子と翔太が、そつと靴をはいている。

翔太「（小声）ホントに秘密で行くの？」

涼子、指を口に当て、

涼子「（小さく）シッ！」

そして靴をはいて立ち上がると、

涼子「（大声）じゃあ、ちよつと翔太と図書館  
に行ってくるね！」

美紀の声「ハイ！」

二人、素早く玄関を出る。

そのすぐ後に美紀が来て、

美紀「昼までには帰ってくるんで……」

が、玄関には誰もいない。

美紀「……？」

### ○路上

涼子と翔太が走っている。

翔太「ねえ、これじゃ家出だって！」

涼子「いいから！ どうせ聞いたってダメっ

て言われるに決まってるんだから！ と

にかく走れ！」

○ 駅のホーム

涼子が携帯を耳に当てている。

美紀の声「(大きく)あんだ、なに考えてるの？  
子供たちだけで、そんなの許されるわけな  
いでしよう！」

涼子、美紀の声があまりにうるさいので  
携帯を耳から少し離す。

涼子「でももう切符も買っちゃったし、電車  
ももう来るから」

美紀の声「ダメ！ 戻ってきなさい！」

涼子「(小さく)うるさいなあ。(携帯に)と  
にかく行ってくるから。じゃあね！」

強引に通話を終え、そのまま電源も切る。  
そして、笑顔で翔太を見て、

涼子「よし、これで大丈夫」

翔太「……全然大丈夫な気がしないけど」

○ 小さな木造の駅・ロータリー

閑散とした駅前。

涼子が携帯で話をしている。



相手は祖父の孝造（66）。

孝造の声「（大声）なにを考えとるんだ！来てどうしようっていうんだ？」

涼子「いいでしょう。孫がわざわざ訪ねてきたんだよ。嬉しくないの？」

孝造の声「嬉しくないよ。お前の母さんから電話がうるさくてかなわんよ」

涼子「お母さんは無視していいから。とにかくこっちの駅まで来ちゃってるから。あとはバスに乗るだけ」

孝造の声「（ため息）勝手にしろ。迎えには行かんぞ。そっちで探し出してくれ」

通話が切れる。

涼子、呆れた表情で携帯を見る。

涼子「なんなのよ、もう！」

翔太が不安そうな表情で涼子を見ている。

涼子「（強く）なに？」

翔太「……なんでもありません」

○山間の道を走るバス

深い緑。すれ違う車はほとんどない。

翔太の声「ねえ、どうしておじいちゃんとお

父さんは仲が悪いの？」

涼子の声「おばあちゃんが死んだ後、いろい

ろあったんだよ……確か」

翔太の声「いろいろって？」

涼子の声「あたしもよく覚えてないけど、お

じいちゃんが急に会社やめて、山の中に

引っ越しちゃったの。いきなり社長になっ

たお父さんは凄く大変だったみたい」

○バスの中

客は涼子と翔太の他二人しかない。

翔太「で、おじいちゃんはこんな山の中で何

をしてるの？」

涼子「なんか自給自足の生活してるんだって。

前にお母さんが言った」

翔太「ジキュウジソク？」

涼子「畑で野菜とか自分で作って食べたりす

るみたいなさ」

翔太「野菜か。なんかどんどん行きたくなくなってきた」

○バス停

バスが走り去り、涼子と翔太が残る。

周囲は山ばかり。人家は数えるほど。

涼子、携帯を取り出し、かけようとするが圏外である。

涼子「圏外！」

翔太は、はるか彼方をじっと見ている。

翔太「ねえお姉ちゃん。あれ海かな？」

と遠くを指差す、

山の開けたずっと先に光るものが見える。

涼子「うん、海……だね」

二人、しばし海を眺める。

そこに森山大地（12）、太陽（9）の兄弟がくる。

涼子「ねえ、あの？」

立ち止まる大地と太陽。

涼子「このへんに山上っていう人の家がある

の知らない？ 六十才か七十才くらいの男の  
人が住んでるんだけど」

大地「知ってる」

嬉しそうに顔を見合わせる涼子と翔太。

涼子「どこ？ どこににあるの？」

○建造の家・外

コンクリート打ちっばなしのモダンな外  
観の二階建て。

それを見上げる涼子と翔太。そばに大地  
と太陽もいる。

翔太「なんか恰好いいね」

涼子「うん。でも、なんかイメージが違う」

太陽「じゃあ、俺たちこれで」

涼子「あっ、うん、どうもありがとう」

○同・玄関・外

顔を見合せ、うなずきあう涼子と翔太。

涼子がインタホンを押す。

建造の声「鍵ならあいてるから勝手に入って

あがってこい！」

○同・中

恐る恐る涼子と翔太が入ってくる。

涼子「（小さく）おじゃましまーす」

○リビング

広く立派なリビング。家具類なども高級  
そうな雰囲気。

そこに入ってくる二人。室内を見回す。

翔太「………なんか凄いね？」

涼子「うん。凄い」

ドタドタと足音。孝造がくる。

孝造「まったく、お前の母さんからの電話が  
しつこくてうんざりしたぞ。まあ、電話の  
線、引っこ抜いてやったから、今は静かな  
もんだけどな」

と言ってから涼子たちを見る。

孝造「えーと、涼子………だったな？」

涼子「うん」

孝造「(翔太を見て)こっちは何だ？」

翔太「翔太……です」

涼子「あの、弟」

孝造、翔太をまじまじと見て、

孝造「なるほど。赤ん坊の時に見たような気もするな」

会話が途切れ気まずい雰囲気。

涼子「あ、あの自給自足の生活してるって聞いてたんだけど、ずいぶん……」

孝造「自給自足？ やるかそんなもん。偏屈なジジイのふりしときやあ郁夫らも寄ってこんだろうと思って、そう言っただけだ」

涼子「(苦笑い)そう……なんだ。ハハ」

孝造「なんだか知らんが、来ちまったもんはしょうがない。好きにしてろ。喰い物なら台所にあるから好きなだけ喰え」  
とりビングを出ようとする。

涼子、翔太をつつき、

涼子「(小声)翔太、早く！」

翔太「な、何を？」

涼子「なんのためにここに来たんだ？」

翔太「ぼ、僕が……言うの？」

涼子「（大きく）おじいちゃん！」

孝造、立ち止まり振り向く。

孝造「なんだ？」

涼子、翔太の背中をつつく。

翔太「あ、あの、おじいちゃんに会社に戻ってほしくて」

孝造「？」

涼子「あの、おじいちゃんが作った会社。今いろいろ問題があって」

翔太「会社の人が、おじいちゃんが戻ってくれば大丈夫だって言ってた」

孝造「（苦笑）なんだ、そんなことか。俺は戻らんぞ。俺はとっくの昔にやめた人間だと再び歩きます。」

涼子「でも、放っておくと会社潰れちゃうかも。それにお父さんとお母さんだって」

孝造、いらついた表情で立ち止まり、

孝造「(強く)しつこいな！俺はもう会社とは関係ないんだ！それ以上ガタガタ言うなら帰れ！」

涼子・翔太「……………」

孝造「どうした、帰れよ！これでもう用済みだろう！」

と言ってから壁の時計を見る。

時刻は午後の一時近い。

孝造「(ため息)もう行っちゃまったか」

涼子・翔太「？」

孝造「お前らが乗ってきたバスだ。あれが戻ってきて今日のバスは終わり。しようがない。

今日は泊ってけ。で、明日になったらさっ

さと帰ってくれ」

と歩き出すが、立ち止まり、振り返る。

孝造「あと二階には来るな。絶対だ。いいな、

絶対に俺の邪魔をするな」

とりビングを出ていく。

茫然とする涼子。

涼子「なんなの、あのジジイ」



翔太の声「ねえ、おねえちゃん」

○同・キッチン

涼子が入ってくる。

先に来ていた翔太がキッチン内を見回している。

大きなビルトイン食洗機にやたらと豪華なシステムキッチン。そして業務用とも思える大きな冷凍冷蔵庫がある。

涼子「（呆気）なにこれ？」

翔太、冷蔵庫を開け、

翔太「すげえ食べ物だらけだ」

涼子も覗きこむ。そこには冷凍食品がぎっしりと詰まっている。

翔太「確かおじいちゃん、好きな物を食べていって言った」

顔を見合わせニヤリと笑う涼子と翔太。

×

×

×

×

レンジのチンという音。

掴みをはめた翔太が、慎重にグラタンを

取り出す。

涼子は、オーブンの扉を開け、ピザの焼き具合を確認している。

涼子と翔太、顔を見合わせ再び笑う。

○同・リビング（夜）

テレビがアニメを放送している。

テーブルいっぱいにはグラタン、ピザ、ハン

バーグ、シューマイなどの食べ物。

それをガツガツと食べる涼子と翔太。

そこに孝造がやってくる。

やりすぎたかと顔を見合す二人。

が、孝造は別に怒りもせず、

孝造「ずいぶん喰うんだな。（ピザを見て）う

まそうだな」

と一切れ取り、それを食べる。

涼子「あの、おじいちゃんも食べたら？」

孝造「いや、俺は一つで十分だ」

翔太、そっとテレビのリモコンに手を伸

ばしテレビを消す。

孝造「なんだ？　どうして消すんだ？」

翔太「食事中は静かにした方がいいかなって」

孝造「（笑って）そんなもんお前の勝手だろ。

好きにしろ」

トリビングを出ていく。

翔太、嬉しそうな顔でリモコンを取り、

翔太「意外と話せる人だなあ」

涼子、立ち上がり、建造を追っていく。

○同・キッチン

皿にシリアル。孝造が牛乳をかける。

それを見て驚く涼子。

涼子「シリアル？　シリアルが晩ごはんなの？」

孝造「なんだ？　夜にシリアルを喰ったらい

かんのか？」

涼子「そうじゃないけど、いっぱい食べ物が

あるのに」

孝造「あれは万が一の時のための非常食だ。

俺は喰い物に興味はない」

涼子「興味？」

孝造「そうだ。それに晩飯を軽くするのが長  
生きの秘訣なんだ」

涼子「長生き？」

孝造「いちいち驚く奴だな。そうだよ。俺は、  
まだまだ死ぬわけにはいかんだ」

涼子「長生きしてどうすんの？」

孝造「なんだ、俺に死ぬと言うのか？」

涼子「そんなこと言ってないけど」

二人で牛乳のかかったシリアルを見る。

涼子「ねえ、本当に会社には戻らないの？」

建造「無理だ。何度も言わせるな。だいたい、  
なんでお前たちが会社の心配をするん  
だ？」

涼子「会社っていうか、その……」

と言葉に詰まる。

建造は、そんな涼子の表情をじつと見る。

翔太の声「お姉ちゃん！ 見て」

○同・リビング

涼子と建造が来る。

翔太は、目を輝かせて窓を見ている。

網戸にカブトムシがいる。

翔太「見て！ カブトムシ！」

涼子「ホントだ」

建造「（苦笑）なにかと思えば。そんなもんが  
珍しいのか」

翔太「（建造に）捕まえていい？」

建造「好きにしろ。なんでそんなことをいち  
いち訊くんだ？」

翔太、そっと窓を開けカブトムシを捕ま

え、嬉しそうに涼子と建造を見る。

翔太「おじいちゃん、ここカブトムシとかいっ  
ぱいいるの？」

建造「そりゃいるだろう。山だからな」

翔太「もっと捕まえたい！」

建造「（笑って）だから、好きにしろ」

翔太「どこにいるの？」

建造「知らんよ、そんなの。まあ、でも朝に  
散歩をするから、その時にこの辺りを案内

してやってもいいぞ」

翔太「やった！」

○同・和室

時計は十時。

涼子と翔太がそれぞれ布団に寝ている。

涼子、そつと上半身を起こす。

○同・階段

薄暗い階段。

涼子が、足音を忍ばせて登っていく。

○同・二階・廊下

暗い。涼子がそつとやってくる。

ドアの隙間からわずかに光が漏れている。

ドアノブにそつと手をかける。

その時、背後から背中を叩かれる。

小さく悲鳴を上げて振り向くと、そこに

いるのは翔太。

涼子「（小声）おどかさな！」

翔太「(小声) やめた方がいいよ。絶対怒られるから」

涼子「でも」

翔太「(大真面目に) おじいちゃんには何か秘密があるんだ。きっとなんか凄いや研究をしてるんだよ」

○山の中の道(早朝)

建造、涼子、翔太が歩いている。

翔太は、ビニール袋に昨夜捕まえたカブトムシを入れている。が、その表情は訝えない。

建造「なにを不貞腐れてるんだ？」

翔太「だってさあ」

建造「(笑って) 俺は山を案内してやるって言ったんだ。案内してるだろう。ただカブトムシのいる場所なんて知らん」

前方から大地と太陽、そして二人の両親である栄一(39)と奈緒(36)がくる。

すれ違いざま、太陽が翔太のカブトムシ

をじっと見る。

翔太「(見せて)いいだろ、昨日捕まえたんだ」

太陽「そんなの山にいつぱいいるよ」

翔太「(大きく)どこ！ どこどこ！ 教えて」

太陽「(困り顔)うーん」

涼子「どうしたの？ 知ってたら教えてあげて」

太陽「いいけどさ」

と困ったような顔で大地、そして奈緒の顔を見る。

奈緒「あんまり自然の生き物を捕まえるのって感心しないな」

涼子・翔太「？」

奈緒「自然は自然のままが一番だよ。カブトムシだって人間に飼われるより、自由に自然の中を飛びたいだろうしさ」

翔太「はあ……？」

奈緒「できれば、そのカブトムシも逃がしてあげて欲しいな。それじゃあ」

と奈緒と栄一が歩きだす。



大地と太陽もその後ろに続く。

が、大地と太陽が振り返る。そして太陽が口を大きく開き「あ・と・で」と合図。

涼子と翔太、その意味を理解して大きくうなずく。が、時間がわからない。

涼子、声を出さずに「な・ん・じ？」と訊き、手首の辺りを指差す。

大地が両手のひらを涼子にジェスチャーで示し、地面を指差す。(十時にここ)

「OK」の合図をする涼子。

建造「あいつらこそ自給自足の生活とやらを目指して、去年ここに越してきたんだ」と少しいまいましたそうに言う。

○建造の家・玄関・中

涼子と翔太がパッキングされたリュックを置く。

涼子「よし、これで準備完了と」

翔太は少しさびしそうな表情をしている。

翔太「ねえ、本当にもう帰るの？」

涼子「おじいちゃんに断られちゃったからね。  
さっきの子たちとカブトムシを捕ったら  
十二時半のバスで帰ろう」

○森の中

一本のクヌギの木を大地が思い切り蹴る。  
すると木からカブトムシやクワガタが落  
ちてくる。

翔太「すっげえ！」

翔太、太陽と共にそれらを捕る。

涼子、クヌギの木の葉の形を見て、

涼子「この形の葉っぱの木にいるのね？」

大地「そう。この辺にたくさんあるから」

涼子、別のクヌギの木を蹴飛ばす。

ボトボトとカブトムシが落ちてくる。

大地「(笑って)スゲー力」

涼子「うん。あたし男子に負けるの嫌いな」

×

×

×

×

それぞれのビニール袋の中にたくさん  
のカブトムシやクワガタ。

あまりにたくさん捕れすぎたので翔太が  
小さいのやメスを選び分けている。

翔太「メスは恰好悪いからいらない」

涼子「なに、その言い方、ムカつく」

涼子、ちらりと腕時計を確認する。

が、そのまま何も言わない。

遠くからバスの音が聞こえる。

涼子は、気付くが聞こえないふり。

○森の中の開けた場所

遠くに海が輝いて見える。

翔太と太陽がカブトムシを戦わせている。

涼子と大地は、少し離れた場所で並んで

座っている。

大地「(笑って)自給自足ってほどじゃないよ。

お父さんは街で一応仕事もしてるし、買い

物だって普通にしてるから」

涼子「そっか」

大地「君のおじいさんこそ何をしてる人なの？  
なんか家、すごいよね」

○建造の家・リビング

涼子、翔太、大地、太陽がやってくる。  
大地と太陽、目を丸くして室内を見回している。

涼子がリモコンでエアコンをつける。

太陽「すっげえ！ エアコンだ！」

涼子「（大地に）家にエアコンないの？」

大地「うん」

太陽、大画面のテレビを見て、

太陽「見て！ テレビがすごいおっきい！」

涼子「ひょっとしてテレビもなかったりして」

大地「前の家にはあったんだけどね」

涼子「まじ？ テレビが無いとか信じられない」

× × × ×

ピザやグラタンなど大量に作り、四人で  
楽しそうに食べている。

そこに建造がくる。

緊張して顔を見合す子供たち。

建造「なんだ、いたのか」

涼子「バス……：：：乗り遅れちゃって」

建造「ふーん。まあ、いいか」

とピザを一切れとり、食べる。

建造「うん、うまい」

と去っていく。

大地が何か訊きたそうに涼子を見る。

涼子「(笑って)おじいちゃんが何をしてるの

か、あたしにもわからないの」

×

×

×

×

夕食。涼子と翔太はピザやグラタンなどの残り。建造はシリアルを食べている。

インタホンがなる。

不思議そうに顔を見合す三人。

再びインタホン。間をおかずに二度、三

度としつこく鳴る。

建造「なんなんだ、いったい」

○同・玄関・中(夜)

ドアを開ける建造。

外に奈緒がいる。その後ろに大地と太陽。

奈緒、無言でマンガ本を建造に差し出す。

翔太「あ、それ俺があげたやつ」

と太陽を見る。

が、太陽はうつむいたまま。

奈緒「(建造に) こういうのは困ります。うちにはうちの教育方針がありますから」

建造、マンガ本を受け取りながら翔太と

太陽の顔を見て、

建造「なるほど」

奈緒「マンガよりも素晴らしいものを子供たちは享受していますから」

建造「……」

奈緒「ここには素晴らしい自然があります。

コンピュータもテレビも子供たちには必要ありません。もっと大切なことを学んでいる最中なんです」

建造、返事をせず、うるさそうな表情。

奈緒、翔太や涼子を見て、

奈緒「カブトムシを捕まえたって気持ちちは否定しないけど、自然と共に生きるって感

覚を学んで欲しいな。ここにはさ」

建造「（大きく）わかったから、もう帰れ！」

奈緒、驚いた顔で建造を見る。

建造「なんなんだ、黙って聴いてりゃあ偉そうに！ 何が悲しゆうて、お前なんぞに説

教されなきゃならんだ！ 帰れ！」

驚いた奈緒、突っ立ったまま。

建造「帰れって言ってるだろうが！」

と猛烈な剣幕で奈緒に近づいていく。

涼子、そこに割って入り、

涼子「おじいちゃんダメ！」

建造「さっさと帰れ！ 帰れよ！」

奈緒、やや怯えた表情で玄関を出る。

続いて大地と太陽。

途中で大地が振り返る。涼子と視線が合うが、そのまま出ていく。

午前に準備した涼子たちの荷物が、そのまま玄関に置いてある。

建造「（荷物を見て）明日は帰るんだな？」

涼子「……………うん」

建造「そうしてくれ。俺は、自分のことだけでいい。自分でどうにかできることをやる。それだけでいっばいなんだ」

涼子「おじいちゃんは、ここで……」

と質問を口にしかけるが、建造はずんずんとして行ってしまう。

○バス停（日替わり）

リュックを背負った涼子と翔太がいる。

翔太「なんか、まだ帰りたくないね」

○森山家・庭にある畑

大地と太陽が奈緒や栄一と共に畑仕事をしている。

太陽、ちらりと家の中の時計を見る。

十二時二十分。

太陽「（小声）お兄ちゃん」

大地「……（うなづく）」

○バス停



バスがやってくる。

涼子「ねえ翔太？」

翔太、涼子の顔を見る。

涼子「帰るのやめようか？」

翔太「（ニツコリ）うん」

涼子、歩きだす。が、その方向は建造の家とは逆である。

翔太「でも、どこ行くの？ そっちはさ」

○山道

ぐんぐん歩く涼子。後ろに翔太。

正面から大地と太陽が走ってくる。

涼子と大地、お互いの顔を見て笑顔が浮かべる。

○森の中の開けた場所

遠くに海が光って見える。

涼子たち四人が腰をおろしている。

大地「これからどうする？」

涼子「（笑って）さあ？ どうしようかな？」

太陽、遠くの海をじっと見て、

太陽「海行きたいね」

翔太「うん。行きたい」

涼子「行ってみようか？」

大地「えっ？　どうやって？　バスはもう

行っちゃってるよ」

涼子「歩いていこう。見えてるんだから、きつと行けるよ」

涼子、立ち上がり、辺りを見回す。

涼子「この辺には川はないの？」

大地「川なら（指差し）この下にあるけど」

涼子「（ニッコリ）じゃあ川沿いにずっと歩いていけばいいんだ。知ってる？　どんな川も最後は海に繋がってるんだよ」

太陽「（大地に）ホントに？」

大地「まあ理屈は」

涼子「よし決まり！　行こう！」

と歩き出す。

太陽「ホントに……海に行けるんだよね？」

涼子「（振り向いて）バッチリ！」

嬉しそうに顔を見合す太陽と翔太。

翔太「よし、行こう！」

と太陽と共に走り出す。

大地、やや困った表情を浮かべるが、そのまま三人についていく。

○ 沢

四人が沢の水をじっと見ている。

翔太「ホントに飲めるの、これ？」

涼子「うん、大丈夫。行け！」

翔太、手にすくって水を飲む。

翔太「おいしい！」

涼子「ホントに？ よし！」

と涼子も水を飲む。

翔太は怪訝な表情。

翔太「ぼくを実験台にしてない？」

涼子「(笑って)ううん、してない。水、すっ

ごいおいしいね！」

×

×

×

×

沢沿いを歩く四人。

段差のあるところは手を繋ぎ、助け合っ  
て下りる。

× × × ×

休憩し、ピザを食べている。

翔太「良かったね、ピザ持ってきて」

涼子「うん」

太陽「うまい！」

× × × ×

沢沿いを歩き続ける四人。

陽が傾き始めている。

翔太と太陽が少し不安な表情。

翔太「ねえ、海ってさ、いつ着くの？」

涼子「うーん、明日かな？」

太陽「明日？　じゃあ今日どこで寝るの？」

涼子、あたりを見回し、

涼子「まあ、普通にこの辺？」

太陽「えー！（と大地を見る）」

大地「（笑って）大丈夫だよ。天気もいいし。

一晩くらい、こういうところで寝るのも楽し  
いだろう」

太陽「でも、お母さんが……」

大地「それも大丈夫。もし怒られるなら、俺が怒られるから。俺っていうか（涼子を見て）俺たちかな？」

涼子「（笑って）そう、あたしたちが怒られる。

だから子供は心配しないの」

× × ×

夜になっている。

翔太と太陽はリュックを枕に寝ている。

涼子と大地、そんな弟たちを見ながら、

涼子「さっきはありがとう」

大地「何が？」

涼子「なんか……弟たちを説得してくれて」

大地、答えずに夜空を見上げる。

無数の星が瞬いている。

涼子「（見上げ）星ってこんなにあるんだね」

大地「うん。ここにくるまで、俺も知らなかつ

た」

涼子「去年、引越してきたんでしよう？」

大地「そう。（笑って）お母さんが急に自然に

目覚めちゃって。自然の中で家族が一つになつて暮らすんだって」

涼子「嫌じゃなかった？」

大地「まあ、しようがないよね。言つて聞くような人たちじゃないし」

涼子「大人だね。あたしは、『しようがない』みたいに考えるのがすごい嫌」

大地「うん、わかる。でも、しようがないことつてあるから」

涼子「ちゃんと親に嫌だつて言った？」

大地「……」

涼子「言えば聞いてくれたかもしれないのに」  
大地「さあ、それはどうかな」

とやや不機嫌そうに言う。

二人の間に気まずい雰囲気の流れる。

その時、森の中からガサガサという音が聞こえてくる。

涼子「なに今の？」

大地「シッ！」

耳を澄ます二人。

ガサガサという音が続く。

大地「（小声）熊かもしれない」

涼子「熊！」

大地「静かに」

と涼子の手を握る。

緊張し耳を澄ませる二人。

ガサガサ音は徐々に遠ざかっていく。

涼子と大地、安堵の表情を浮かべる。

涼子「（小声）ホントに熊だったのかな？」

大地「わからない……でも、とりあえず、

もう行ったことにしよう」

と笑いながら握った手を離す。

涼子、自分の手を見て、少しだけ微笑む。

×

×

×

×

朝日が昇っている。

ピザの匂いを涼子と翔太が嗅いでいる。

涼子「大丈夫だから食べてみなよ」

翔太「またぼくが実験台？」

大地と太陽もピザの匂いを嗅ぎ、

大地「ちよっとチーズが心配かも」

涼子「（嗅いで）うん、確かに」

翔太「もう、お姉ちゃん！」

涼子「わかった。あたしが実験台になる」

とチーズをそぎ落としてピザを食べる。

涼子「うん。大丈夫。食べられる」

× × ×

陽が高くなっている。

沢沿いを歩き続ける四人。涼子、翔太、

太陽、大地の順。

太陽、振り返り大地に、

太陽「（小声）ねえ、本当に今日中に海に着けるのかな？」

先頭の涼子にも太陽の言葉が届いている。が、涼子は聞こえないふりをしてずんずんと歩き続ける。

○建造の家・玄関・外

建造、奈緒、栄一がいる。

建造「（大声）だから、知らんもんは知らんよ！警察にも連絡したし、他にどうしろと言う



んだ！」

奈緒「無責任なこと言わないでください！」

○山上家・ガレージ

運転席に郁夫。厳しい表情。

美紀が無言で助手席に乗り込む。

○砂防ダムの上

やや陽が傾き始めている。

落差五メートルほどの砂防ダム。

涼子が、その上に立ち、はるか先に小さ

く見える海をじっと見ている。

翔太と太陽が、恐る恐るダムの縁から下  
を覗きこむ。

翔太「こりゃあ無理だよ」

太陽「(大地に) どうするの？」

大地、周囲を見回し、

大地「(指差し)あの辺りからまわっていけば  
降りられるかな」

涼子、海の方を向いたまま、

涼子「ねえ、もう帰ろうか？」

驚き、顔を見合わせる大地、翔太、太陽。

振り返る涼子、ニコニコと笑っている。

涼子「だって海なんて行けるわけないし」

翔太「なんだよ、今さら！」

太陽「そりゃあないって」

涼子「(笑って)だって無理なものは無理なんだから」

大地は涼子の顔をじっと見ている。

大地「いいの、それで？」

涼子「(ニコリ)うん。だってほら、しょうがないから。いくら頑張ったって、どうにもならないことってあるから」

翔太「そりゃあそうだけどさあ」

涼子、再び前を向き海を見る。そして足元の滝つぼを見下ろす。

涼子「でも、あたしも自分の力でどうにかできるとは自分で解決するんだ」

振り返り大地を見て微笑む。

涼子「これっくらいなら余裕。全然たいした

ことない」

と大きくジャンプ。滝つぼに飛び込む。

驚いて下を覗きこむ三人。

涼子は水から顔を出し、笑顔で大きく手を振っている。

翔太「（泣き声）もう、なにしてんだよ！ 危ないよ！」

涼子「あんたたちも早くおいでよ！ 気持ちいいから！」

翔太「無理だよ！ こんなとこ跳べないよ」

大地「（笑って）あっちから行こう。落ち着けば大丈夫だから。太陽、任せたぞ」

太陽「（不審）う、うん：：：お兄ちゃんは？」  
大地もジャンプ。涼子の近くに飛び込んでいく。

太陽「お兄ちゃん！」

大地、水から顔を出し、

大地「大丈夫。迎えに行つてやるから。落ちて着いてあっちから降りてこい！」

顔を見合わせ笑い合う涼子と大地。その

まま水にぷかりと浮かび空を眺める。

○建造の家・外（夕方）

数台の警察車両がある。

郁夫、美紀、奈緒、栄一が警官にペコペコと頭を下げている。

郁夫「本当に申し訳ありません。お騒がせしてしまっ

警官「（笑って）でもまあ無事で良かった」

○同・玄関・中（夕方）

涼子、翔太、大地、太陽、建造がいる。

建造「しよがないだろう！ 子供が四人もいなくなりやあ警察も呼ぶし親も呼ぶよ！」

そこに郁夫、美紀、奈緒、栄一がくる。

郁夫「まったく、心配かけて」

涼子「ごめんなさい」

郁夫「さあ帰ろう」

涼子、建造の顔を見る。が、建造は知ら

ん顔をしている。

奈緒「(大地らに) さあ、あたしたちも帰りましょう」

涼子「(建造に) ねえ、帰らなくちゃダメ？」

建造「好きにしろ。俺はどっちでも構わん」

郁夫「ダメだ。わがママを言うな。これ以上みんなに迷惑をかけるな」

涼子「(建造に) あたしたちがいると迷惑？」

建造「いちいち俺に訊くな。自分で決めろ」

郁夫「父さんは黙っててくれ。勝手なこと言わないでくれよ」

美紀「涼子、いつからそんなに聴き分けの悪い子になったの？ 自分勝手なことを言わないの」

涼子「.:.:.:」

美紀「あたしたちがどれほど心配したと思ってるの？ もっと人の気持ちを考えられるようになりなさい！」

郁夫「そうだ。人に迷惑をかけちゃ駄目だ。ていつも言ってるだろう！」

（涼子の感覚で）

音が消え、何も聞こえてこない。

ただ美紀と郁夫の口がパクパクと動き続け、叱っているのがわかる。

涼子「（小さく）だったら自分たちはどうなんだよ？」

美紀「なに？　今なんて言ったの？　もっと大きな声ではっきり言いなさい！」

涼子、キツと顔をあげ美紀を見る。目には涙がいつぱいたまっている。

涼子「自分勝手なのはどっちなのよ！」

郁夫「なんだ、その口の効き方は！」

美紀「あたしたちがいつ勝手なことしたのよ？」

涼子「人の気持ちを考えてないのはどっちなのよ！　子供になら、迷惑がけてもいいの？」

郁夫「だから俺たちが、いつ子供に迷惑をかけた？」

涼子「（大きく）勝手にすればいい！　子供の

ことなんて考えないで、なんでもかんでも勝手に決めればいいんだ！ 自分勝手なのはあなたたちでしょう！」

郁夫と美紀、涼子が暗に離婚のことを言っていることに気づき、気まずい表情。

涼子「好きなようにすればいい！ 子供の気持ちなんて考えないで、勝手に全部決めればいいんだ！」

郁夫・美紀「……………」

建造がクスクスと笑いだす。

建造「良く言った、涼子。もっと言ってやれ。

好きなことを全部ぶつけてやれよ！」

涼子、建造に向き直る。

涼子「おじいちゃんだって勝手だよ！」

建造「(キョトン) 俺もか？」

涼子「だってそうでしょう！ 急に会社やめてこんなところに住んで！ お父さんがどれだけ大変だったかわかってんの？」

建造、郁夫の顔を見る。

涼子「みんな……………みんな勝手じゃないか！」

だからあたしだって勝手にしたんだ」

建造、大きくため息をつく。

建造「涼子、上に来い」

涼子「……？」

建造「俺の自分勝手の理由を見せてやる」

○同・二階・建造の部屋

扉を開けて建造と涼子が入ってくる。

その後から翔太や大地、太陽。そして郁夫や美紀、奈緒、栄一も来る。

二階のすべてが一つの大きな部屋になっていて、三方の壁や室内にまるで図書館のような書架が並び、そのすべてに本がびっしりと詰まっている。

涼子、それを感嘆の目で見まわし、

涼子「すごい。これ全部おじいちゃんのもの？」

建造「俺のというか、まあ吉江の本だ」

涼子「吉江？」

建造「女房だ。お前のばあちゃんだよ。涼子が、まだ赤ん坊の頃に死んじゃった」



涼子「おばあちゃんの……本」

部屋の奥に机があり、吉江の笑顔の写真が飾ってある。

涼子、その写真をじっと見る。

建造「俺たちは結婚してすぐ、二人で会社を作った」

涼子「山上ハム」

建造「そうだ。朝から晩まで必死になって働いたよ、二人でな。(笑って)なのに、あいつはせつせと本を買ってくるんだ」

とずらりと並んだ本を見回す。

建造「本が好きだったんだよ、あいつは。結婚する前から」

涼子「……」

建造「よせて言ったんだよ。どうせ読む暇なんかねえんだから。けど、あいつは会社を郁夫に譲って、時間ができたら読むんだって買って買うのをやめねえんだ。でも、その前に、あいつは死んじゃった」

涼子「……」

建造「あいつが死んでからも、俺は会社を続けた。けど、なんか張り合いがなくなっちゃまってな。で、ある時、なんとなくあいつの残した本を読んでみたんだ。そしたら」と言っただけで照れたように笑う。

涼子「そしたら？」

建造「面白かったんだ。びっくりするほど面白かったよ。俺は、あいつと違って本なんて読んでこなかったから、こんな面白い世界があるなんて、思いもしなかったんだ」

建造、書架から一冊の本を手取る。

建造「それで俺は決めた。この本は俺が全部読む。読まねえまま死んじゃった吉江の代わりに俺が全部読む。それで、あの世であいつに聞かしてろうと思っただけ」

建造、涼子を見る。その目はうるんでいるようにも見える。

建造「まあ、そういうことだ」

涼子「だったら、そう言えば良かったのに」

建造「(笑って)バカ！ そんなこと恥ずかし

くて言えるか！　（郁夫を見て）まあ、そういうことだ。悪く思うな」

郁夫「いいよ。それに時代も違うし、もし父さんが戻ってきててもダメだと思う。俺が最後まで責任とるよ」

「最後まで」という言葉に反応し、涼子は悲しげな表情で郁夫を見る。

郁夫「そういえば母さんは本が好きだったな」と書架を見回し微笑む。

涼子も無理に笑顔を作り、本を見上げる。

涼子「これがおじいちゃんのをやりたかったことか……もう、どれくらい読んだの？」

建造「ここら辺りが読んだやつだ」

と一つの書棚を指差す。

それは全体の十分の一にもならない。

涼子「（噴き出して）まだ、いっぱい残ってるじゃん！」

建造「だから俺は長生きをしなくちゃならないのだ。夜にシリアル喰って、朝にウォーキングして健康第一に考えてんだよ。なのに

お前たちが邪魔するから！」

笑い合う涼子と建造。

大地、並んだ本を興味深そうに見ている。

建造「(大地に)読みたい本があるなら持って  
いっていいぞ」

大地、建造を見て嬉しそうな顔をする。

建造「ただし貸すだけだ。必ず返しにこいよ」

奈緒、不服そうな表情。何かを言いたそ  
うに口を開きかける。

大地「(奈緒に)本を読むのもダメなの？」

奈緒、少し驚いた表情。

奈緒「ダメってわけじゃないけど」

大地「俺は本やマンガが読みたい。それが悪  
いのかな？ テレビやゲームだって何が

悪いのがわからないよ」

奈緒「だってマンガやゲームは……」

太陽「(強く)面白いよ！ マンガはすっごい  
面白いから！」

奈緒「……」

大地「(強く)俺たちだって、いいか悪いかく

らい判断できる。もっと俺たちを信用してくれよ！」

奈緒、栄一と顔を見合わせ困った表情。

涼子、大地と視線が合う。そして「よし！」と笑顔でガッツポーズ。

○建造の家・前（夕方）

乗用車。運転席に郁夫。助手席に美紀。

車の外に涼子と翔太がいる。

見送る建造、大地、太陽、奈緒、栄一。

翔太「じゃあな」

太陽「また遊びに来いよ」

翔太「おう！」

翔太、リュックからマンガ本を取り出し、

翔太「じゃあ、これ」

と太陽に手渡す。

太陽、ちらりと奈緒を見るが、奈緒は何も言わない。

太陽「ありがとう」

翔太「じゃあな」

と後部座席に乗り込む。

涼子「（建造に）じゃあ、とりあえず帰るね」

建造「どうだ、ちつとはすっきりしたか？」

涼子「うん」

建造「よし。じゃあ、またそのうち遊びにこい。俺は、当分死なねえから」

涼子「もちろん！ また来る！ また絶対遊びに来る！」

涼子、大地の顔を見る。が、言葉が出てこない。無言のまま車に乗り込む。

○車の中

涼子、後部座席から両親の様子を見る。

二人は、顔をそむけ合い、ギスギスとした雰囲気は変わっていない。

小さくため息をつき、そして苦笑する。車が走り出す。

涼子、後ろを振り返る。建造、そして大地の姿が見える。

窓を開ける涼子。体をぐっと乗りだし、

大きく手を振る。

涼子「(大きく)じゃあ、またね！　また遊び  
にくるから！」

○建造の家・前

手を振り返す建造、隣にいる大地の背中  
を叩き、

建造「(笑って)手くらい振ってやれよ。まっ  
たく」

大地、少しためらいながらも手を振る。  
が、すぐに大きく手を振り始め、二歩、  
三歩と車に向かって走る。

○走る車の中

建造や、手を振り続ける大地の姿が徐々  
に小さくなっていく。

涼子、車から身を乗り出したまま、いつ  
までも笑顔で大きく手を振り続ける。

了

